

成溪會誌

1998.1 No.86



特別寄稿

新しい時代に備えて	宇野 重昭	2
日本人の起源―三重構造モデル	埴原 和郎	3
樹木の冬芽を楽しむ	菱山忠三郎	8
テント屋の大風呂敷	能村 卓	12

随想

車山高原の休日	長谷川一郎	18
コートの上を旗が舞う	中村 温	20
鯨の話―江戸橋のたもとから―	佐久間司郎	22
私のテディベア物語	徳川 静子	24
ベトナム・ナウ	島村 隆一	25
フィリピンがくれる時間	真船 晶子	28
旧制高校記念館を訪ねて	丹治 誠	46

大学院でもう一度勉強してみませんか／11
東京の音を尋ねて／17 文化功労者・勲章・叙勲受章者／17
表紙絵の言葉／45 栗原美能留先生を偲ぶ会／47
惜別・追想録／47・69 会員動静／48 物故会員／63
地方同窓会連絡先一覧／64 国際交流会館寄付金状況／65
予告／65 第4回成蹊会学術賞／66 第37回成蹊会謝恩顕彰会／67
四大学運動競技大会／69 成蹊学園の近況／70
学園史料館資料紹介／76 図書館蔵書紹介／78
アジア太平洋研究センター／79 成蹊会報告／80

同窓のしづこ

● 恩師を囲んで	30
● 学校・年次会・ゼミOB会のつどい	32
● 体育会・文化会OB会	35
● 業界・企業のつどい	37
● 地域のつどい	38
● 寮歌祭	44

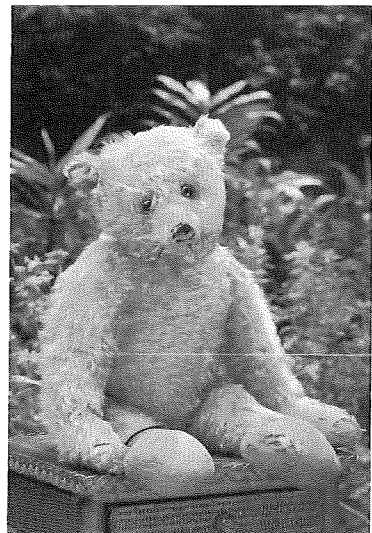
表紙の題字は故上條信山先生、絵は高山知也（文51年）

私のテディベア物語

徳川静子

テディは語る

僕はテディ、ドイツはシュタイフ製の熊のぬいぐるみさ。なぜ、わざわざシュタイフというのだった？ 知る人ぞ知る世界で有名なぬいぐるみのブランド物なんだ。今年はその創業者マルガレーテ・シュタイフの生誕一五〇年記念の年なので、僕も誇りに胸をふくらませて、お祝いの気持ちをこめてテディベアとシュタイフについてひとくさり



これは典型的な初期のフォルムに、ガラス目を持つ1920年代の製品で、デザインはリヒテル・スタイフ。当時の日本では、おそろく数えるほどしかいなかったのではないかと思います。「うちのテディ、元気？」
妹さん達からお兄さんにかかる電話の第一声は今もこれだそうです。

たマルガレーテは幼い時から病気で身体を自由を奪われていたにもかかわらず、常に人一倍の意志の強さと努力で、まず洋裁で身をたててきたが、ある時ふと作った象のぬいぐるみが評判となり、やがて以前から彼女を慕って協力を惜しまなかった兄弟や甥達、友人達と本格的なぬいぐるみの事業を始めた。「子供達には本当に良質のものを」という彼女のクラフトマンとしてのポリシーを貫いたシュタイフは今日に至るまで世界で確固たる地位と信用を保っている。

現在伝わるテディベアを最初に作ったのは甥のリヒャルトで、本物そっくりに首や手足が動く熊はアメリカ市場に出るようになって爆発的人気を得た。アイディアル社の前身であるおもちゃやでも独自に同じようなものが作られ、当時副大統領だったセオドア・ルーズベルトが一頭の獲物もなかった狩りで、木にしぼりつけられて撃つようにと差し出された年寄り熊をスポーツマン・シップに反するとキッパリ断ったという美談がワシントン・ポスト紙の漫画で有名になるや、この種の熊のぬいぐるみは彼の愛称をとってテディベアと呼ばれるようになったそう。

影しい数の熊が展示即売されている。かと思つと僕の仲間のテイイガールはクリスティーズで何と一五〇〇万円以上の高値で日本人にせり落され伊豆のミュージアムの人気者になっている。こういうのを聞聞きするたびに僕は「何か違う、何か違う」と思う毎日なんだ。

最近日本でもテディベア・ブームを起そうという風潮があるが、一流企業のロンドン支店長を勤めた人でさえ「テディベアってなに？」「シュタイフ？何それ？」という始末。テディと兄弟のように育ったこの筆者など「ウッ！」と一瞬返事につまってしまった。

僕の前置きが長くなってしまったが、僕は吉祥寺の成蹊に程近い松平家の直寿さん(旧高18回卒)の熊なんだ。今から70余年前、うら若き両親がヨーロッパ外遊への途上、上海で僕を見初め厳格な祖父の許に残したまだ赤ん坊の息子に送り届けた。それ以来彼の旧制高校の寮生活と海軍時代を除いてずっと一緒に暮らしてきた。(テディイガールはボブ大佐とノルマンディ上陸にも加わったのに：日本じゃ考えられないだろう)

テディベア・コンベンションが盛んに開催され、優れた作家が育ち、毎週

さて、彼が幼い頃は寝る間もはなさず、僕のゴールデンモヘアは汗まみれ、当時ぬいぐるみ専門のクリーニング屋なんてないからママはえらく苦労していた。男の子ならイギリスに送るか成蹊にと勧められ、目出度く成蹊に入学。それまで、小公子のような姿の男の子がぐりぐり坊主の制服姿になって僕も

びつくりしたけど誇らしかったよ。

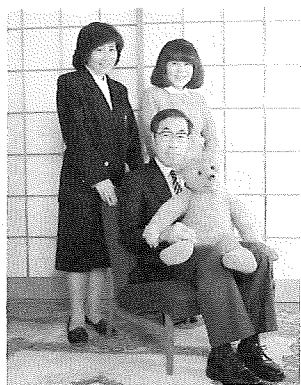
平和な月日が流れ、彼が高校の寮に入ってしまった。何とこんなに年がはなれて妹が二人生まれ、僕は今度は女の子の遊び相手になった。いやはや、この二人ときたら「お兄様のテディ」といいながらよくも遊んでくれたものだ。おかげで淋しくはなかったが、かなりよれよれになってしまった。上の妹が病気で絶対安静の時はサロンのソファの枕許に座ってお守をした。戦争から運良く帰って卒論に取組んでいた兄上は時々ピアノを弾いたりレコードをかけて妹達の相手をして下さる。すると彼女達は同じ背丈の僕の両手をとってウインナワルツはまだしも、トルコ行進曲や軽騎兵

序曲で乱暴にふりまわし、跳びはねるのでとうとう足のフェルトがすり切れ、オガクズが出てしまい、あわてたママは兄上の古い靴下を僕にはかせる始末。シュタイフ特有の黄色い耳タブはなくなりボタンだけがしつかり残った。兄上は妹が「クマちゃん」なんていおうものなら兄貴風吹かして「クマとは何だ！クマといえー！」と今のCMで「カレシ」とうるさく注意するお父さんさながら。また本物の熊は猛獣で危険な動物だとせつかくの気分には水をさす。でもこれって大事なことです。

静かな生活に戻った。テディの願うこと
欧米では子供部屋で独り寝かされる子供にとつて、生まれてからずっと一緒に居たテディベアはどんなにたよりになる仲間だったろう。丸っこくて可愛い雰囲気なのに一本シンの通った、時には厳然としてみえるテディベアが…。

ッションをみてからは、シュタイフのテイイベアをみるたびにこのことを思い、心強く生きていかなくてはと新たに励まされる思いがする。時と所をえらばず要求をつきつけるたまごっちも可愛いけれど、黙っていても頼りになるテイイベア。これからのクリスマス・シーズンにはまた沢山の熊達が皆さんにお目にかかることでしょう。たかが熊、されど熊、ちょっと心をとめて見て下さいませんか？

日本洋書販売配給(高・33年)



右から長女の徳川静子(高9回)
長男の松平直壽(旧高18回)
次女の大坪和子(高12回)
雑誌「私の部屋」一〇〇号記念より

人形コレクターの妹は、どんなアンティークベアをみても「うちのテイイの方が可愛い」というので「私の部屋」のグラビアに出たのをきつかけにテレビに出演したり展覧会に貸し出された。久しぶりに再会して僕を抱いた妹は、背のこぶの丸み、モヘアの手ざわり、木毛の香りにしばしうっとりしていたが、鑑定家に「もう少し状態がいいとね…」と言われて兄上は「お前がこんなにしたんだぞ」とちよつと残念そう。多くの人に夢とインスピレーションを与えるのは嬉しいが、たとえ一五〇〇万の保険をかけられても、もしものことがあったら切腹しても(旧いね!)お兄様に申し訳がたないか

海外だより

しまむらりゅういち
島村隆一

はじめに

シンチャオ(こんにちば)! 覚えてたのベトナム語で声を掛けると日本人そっくりの顔立ちに人なつっこい笑顔が返ってくる。三年前初めて出張でベトナムを訪れた頃は、大都市にも自動車はほとんど無く、亜熱帯の明るい太陽のもと、都市も農村も総てがゆつたりとしたリズムで流れて居た。

あれからわずか三年、その変貌ぶりは驚くばかりと言わざるを得ない。都市のいたる所で道路の拡張や新しいビルの建設が進み、バイクや自動車が急速に増えた。ドイモイ政策が成功して高度成長(年率約九%)が到来した結果である。
ベトナム戦争の後遺症から立ち直り、今世界でもっとも注目されている国の一つであるベトナムとその人々について

旧制高校 記念館を 訪ねて

丹治 誠

今年八月末、サイトウキネンオーケストラを聴きに松本に出向いた折、旧制松本高校の跡地にある旧制高等学校記念館を訪ねてみた。六月から九月迄の四ヶ月間、七年制高等学校の特別展が開かれ、わが成蹊の展示もあると聞いていたからである。

あがたの森公園のヒマラヤ杉の木立に囲まれたもと松本高校本館は、大正十一年に建てられた瀟洒な木造西洋建築で、ぎしぎし鳴りそうな階段を上ると二階の廊下に沿って小部屋が連なり、武蔵、成城、東京、府立、甲南、浪速等と並んで成蹊高校の展示室があった。

特別展の説明によれば、明治三十年代からすでに中高一貫教育を求める議論があったが、大正七年十二月発布の「高等学校令」で「高等学校の修業年限は七年とし、高等科三年、尋常科四年とす」(建前上は七年制が

本則、高等科のみの設置は特別)と定められ、これを受けて大正十一年四月の武蔵・東京を皮切りに、大正十四年四月の成蹊を含め、九つの七年制高校が設立された。

設立の理念は、大正デモクラシーの風潮のもと、「自主制を重んじ」「個性・創造性の尊重、人格の育成に意を注ぎ」「知育のみならず徳育・体育にも重点を置いた」「英国のパブリックスクールのような、自由闊達な中にも規律のある、師弟一如の教育」という、既存のナンバーワンスクールとは一味違うものであった。

各校の展示を眺めていくと、それぞれ特色を持ちながらも、共通してそのような建学の理念が脈打っているのが感じられた。それは成蹊創立の際中村校長を支えた岩崎、今村両氏がともにケンブリッジ留学を経験し、英国風教育のよさを取入れようとしていたことも軌を一にするものといえよう。

成蹊の展示は、創立の経緯に始まり、歴代校長・先生方の写真や昔の学園風景、成績表まであって、尋常科二年で学制改革のため旧制高校に行き損った私

にも大変懐しいものであったが、とくに印象に残ったのは昭和十八年、校庭で行われた三人の学徒出陣式で竹岡漢一氏に贈られた全教員生徒署名の日章旗であった。

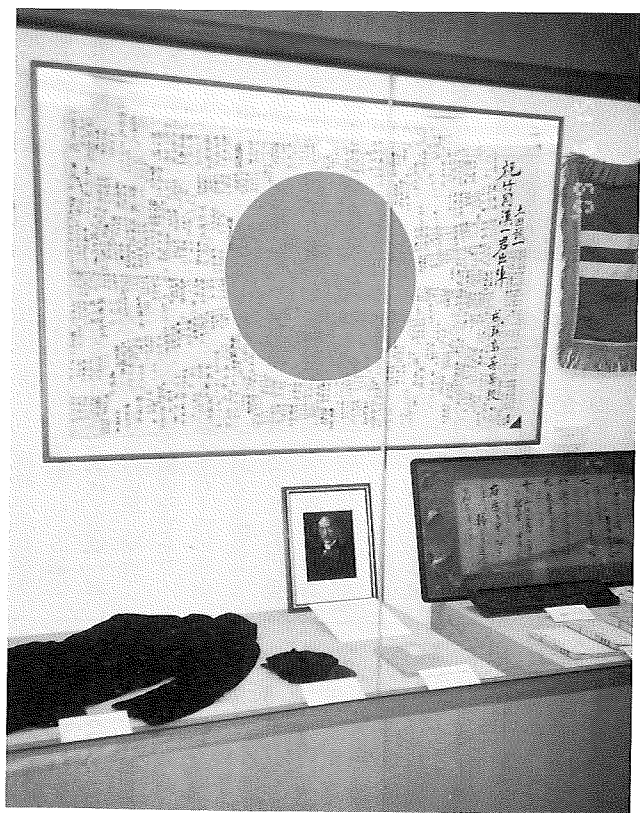
署名者には私より三、四年先輩で存じ上げている人も多く、一緒に行った家内と「あっ、〇さんもいる」などいいながら、随分長い時間をこの旗の前で過した。在籍する全職員生徒が揃って署名するようなのは、この状況下でなければあり得な

かったであろうし、日の丸に記された母堂の和歌や、竹岡氏が間もなく硫黄島で戦死されたとの記述を読むと、襟を正さずにはいられない気持ちであった。

展示を見終って感じたのは、七年制高校、さらには旧制高校の教育は、一握りのエリートのみならず、養育という性格を持っていたにせよ、またそれを懐しむ声には古きよき時代へのノスタルジアがあるにせよ、現代の教育には失われてしまった大事なものを含んでいたのではないかと、こ

うことである。その意味で、この特別展がさらに多くの人の目に触れることなく終ってしまふのはいかにも惜しい、という思いを抱きながら、蟬しぐれのあがたの森を後にしたのだった。

日本開発銀行(高・27年)
〔註〕松本に於ける特別展が好評であった為、平成10年4月1日(木)より同月24日(金)まで、学園史料館で同様の展示をすることになりました。



旧制高等学校記念館本館に展示の中村春二先生肖像画と竹岡漢一氏学徒出陣を送る日章旗

栗原美能留先生を 偲ぶ会

偲ぶ会

「栗原美能留先生を偲ぶ会」が、平成9年9月13日(土)成蹊大学10号館12階のレセプションルームで行われました。



栗原先生は去る4月24日九十五歳で急逝され、遺言による内々での葬儀が執り行われていました。

学内にご連絡をいただいたのは5月の初めでしたが、ご葬儀

も終わっており、どういう形で追悼の会を持つかで延び延びになっておりました。6月の桃友会(先生方のOB会)の折り、栗原先生の訃報をお知らせしたところ、追悼の会を開こうという声が高まり、開催の運びとなりました。栗原先生には多くの方がお世話になっており、旧制高校・新制高校・桃友会・SGC(ゴルフ)・現職の先生・波立間会(水泳師範)・SRC(ラグビー)共催の偲ぶ会が行われたものです。

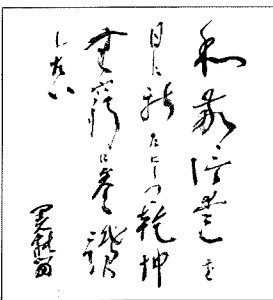
偲ぶ会は一三九名の出席者を得て、三時より高校渡辺一郎先生の司会で開会し、栗原先生の唱える心力歌の第一章で始まり、成蹊学園の三橋専務理事・卒業生代表の河野義克氏・



桃友会の松田満夫先生に弔辞をいただき、続いて親族・代表者(宗像英一氏・吉崎恵次氏・土方敏夫氏・山形為次氏・中山久氏)の献花があり、谷岡喜久蔵前成蹊会会長の献杯で直会に入りました。

祭壇は質素に真ん中に遺影を掲げ、回りに花を飾りました。花の中で先生がこやかにほほ笑み、それぞれが「お世話になりました」とお別れを告げました。

最後に、栗原先生の御子息栗原忠雄氏(ラグビー)より、「和敬信愛を日々新たにしつつ乾坤無窮に参贊したい」という墓標に刻まれたことばの経緯と栗原家よりいただいた色紙の説明をお話いただきました。



開会のとまと同じく栗原先生の唱える心力歌第十六章を唱和し、横地孝中高校長先生の挨拶で5時30分閉会となりました。

定田立郎(経・46年)

朝日新聞夕刊より (1997年8月18日)

さわやか福祉財団理事 五十嵐 純さん 8月8日死去、60歳



「ご案内いたします」。福祉機器の展示会場を訪れた「さわやか福祉財団」の堀田力理事長に、見知らぬ中年男性が近づいてきた。見学中ずっと語り続けた。「これからの福祉は、市民の方でやらないといけない」「草の根団体は大切なんです」「だから、財団の仕事を手伝います」

数カ月後、五十嵐さんは本当にやってきた。92年8月、勤めていた保険会社からの出向だった。社会貢献を考えていた会社に働きかけ、認められた。「温かい触れ合い社会をつくりたい。私の人生をそれにかけます」と堀田さんに語った。財団の事務局長に就任した。

それから5年。葬儀は、東京・中野の寺で行われた。参列者に盛望の日差しが注ぎ、あちこちで囁子が揺れ、ビヤクダンの香りが漂った。葬儀委員長を務めた堀田さんが、弔辞を読んだ。「あなたが逝ってしまっただけで、私の心は寒さでふるえております。高齢者と一緒に、みんなが幸せになれる社会をつくらうと頑張ってきたのに、その高齢者の仲間入りもしないうちに逝ってしまうなんて、早すぎます」

15年ほど前から肝臓が悪かった。C型肝炎で入院を繰り返すうち、残る人生の送りかたを決めた。会社では、社内の高齢者問題を担当していた。書斎に並ぶ本の背表紙すべてに「福祉」や「介護」といった文字が並んでいる。

官公庁をこまめに回った。草の根団体や企業も回り、財団への理解を求めた。ネットワークを着々と築きあげた。出向元を定年になった後も、理事として残った。

仲間の送別会があった。脂汗をかき、体調が悪かった。それでも出席し、ビールで乾杯をした。すぐタクシーで戻り、数日後、最後と

った8度目の入院をした。「今の時代には合わないですけど、そういう人なんです」と財団の後輩の蒲田尚史さんは言った。

「さは、さりながら」が口癖だった。本音を言い、ではあるけれどと続ける。相反する事象を二つ並べ、広い視野で物事を考えるように仕向けた。

亡くなる2日前、堀田さんは、財団職員の寄せ書きを持って見舞いに行った。安心して閉病に専念して欲しいという趣旨の言葉にそえて、堀田さんは「夢」と書いた。その文字をじっと見ていたという。

理解者のネットワークを着々と築いた

五十嵐 純さん(政経・34年)には成蹊会誌81号に「『ふれあい社会』の構築」との題でご寄稿戴きました